



仕事を楽しく 人生を楽しく

専務取締役 大坪重遠

前号に鬼頭教授が落語「あたま山」を枕にふり、上手に話を進めておられる。愛知電機技報を開けると落語がでてくるといふのも楽しかろうと思ひ、落語「浮世根問い」から話を進めることとしよう。これはおなじみの八つあんが、大家さんに際限なく質問して困らせる話である。

「前の街道をあっちへどんどん行くとどこに行きます？」を連発する。始めは町の名前がいくつか出てくるが、そのうちに大家「塀があって、もう行けないよ」、八「塀なんか乗り越してどんどん行くとどうなります？」、大家「だめだよ。この塀登るべからずって書いてあるんだから」、八「書いてあったって構わないから、ぶっ壊してどんどん行けば」、大家「乱暴だね、お前は」と続いてゆく。

「その先は海でもう行けないよ」と大家さんは必死に打ち切ろうとする。八つあんは「船に乗ってどんどん行けば」としつこい。「船が置いてないから行けねえよ」「構うことたあねえ。どぶんと飛び込んでどんどん泳いでゆけば」、大家「その先はもう、モウモウとしちゃって行けやしないんだから」、八「モウモウだって構わない。そこをどんどん行ったら…」、大家「お金やるから、もう帰ってよ」と降参する話である。

技術者らしくなった自分の過去を振り返ってみると、小学校高学年の理科の授業で、ガラスが三角形になったプリズムに太陽の光りをあてて、それが7色の光りになったのに心を奪われたことを思い出す。その後、年が進むにつれて、あの7色から波長の長い赤色のほうへも、また短い紫色のほうへも、両側に目には見えない部分がちゃんと続いて広がっていることも学んだ。

夕立の後の空に浮かぶ虹の紫、青、緑、黄、橙、そして赤と並ぶ、あの光りの色の変化の先をどんどん辿ってゆくと、やがて電子レンジの電波、そしてさらには携帯ラジオを鳴らす電波にまで続いているという事実も教えられた。

このようにして宇宙の中のすべてのものが、一つのルールの上に成り立っていることの一端を垣間見て、科学というものの壮大さに深くに感激したものである。

関係がありそうにもない光りと電波とが、統一されたルール「波動論」で説明できるようになっているのも、さきの「浮世根問い」と考えあわせると、なにか面白い。まさに「ものには訳がある」のであり、それをどこまでも探索してゆく科学とか技術は、本来大変に面白い仕事なのだと思う。

もう一つ「浮世根問い」的な面白さを感じさせるものに、素粒子論がある。これは、宇宙に存在する物質は数種類の粒子からできあがっていて、物質の違いはその粒子の種類と数と、くっつき方の違いによるという考え方である。

目の前にいる美しい女性という物質は、骨、肉、髪、内臓、血液などからできている。それらのものも、実は細胞が集まってできていることは、顕微鏡の力を借りれば肉眼で確かめることができ、納得しやすい。その人間を構成している小さな単位の細胞も、実はもっと小さな水や蛋白質の分子と呼ばれる小さな粒子からできていて、そのことはすでに常識である。ただし、この辺りから浮世的には、人間の感性には訴えず、イマジネーションの世界に入ってゆく。

絶えることのない探索は、ある時代には次のような解明のステップを迎えた。つまり、その分子ももっと小さくもっと基本的な水素や酸素などの原子という粒子からできている。つまり、すべての物質は、92種類ある原子がいろいろの組み合わせでくっついてできているということになった。これは、ある時期を限れば結論のように思われた。

しかし、「浮世根問い」の追求はさらに続く。一番基本的な単位と考えられた原子も、実はもっと小さな電子と原子核からなること、さらに研究が進むにつれて原子核は陽子と中性子とからなることと仮説が唱えられ、やがて実証されるに至った。

アインシュタインが相対性理論を発表し、質量とエネルギーという従来別のものでされていたものを統一された理論で説明し、人類は原子核を分裂させることにより質量をエネルギーに変え、いわゆる原子力を利用するに至った。

そのあとも、学者たちの探索はさらに続けられ、何種類かのクォークというもっと小さな粒子を始め、反電子だなん

だと素粒子論の世界は限りなく騒がしい。物質の根源になる粒子があるはずだという思考の旅の先の先まで際限のない探索が、あるいは、物理学者の脳の中で、そしてトリスタンなどの実験設備で今日も続けられているのである。

今まであげたいいくつかの例は、森羅万象、ゆきあたりばったりではなく、統一された理論があるのではないかという壮大なロマンの追求の過程である。その流れに莫大な時間と金と、なによりも命をすり減らすような学者の情熱と精力が投入されている。そして、その推進力は、金でも名誉でもなく、人間の本性であるもっともっと知りたいという知識欲がそれであるとする。

このような訳で、技術開発にたずさわる者は、人間の本能的欲求の一つの要素である知識欲をフルに発揮させ、楽しく仕事をし、楽しく生きることができやすい環境にいるのだと考える。

ところが、現実にはかならずしも仕事を楽しんでいるように見えないことがある。そんなケースでは、現実には不必要な壁を自分で勝手に作っていることが、結構ありはしないかと心配するのである。

自分は技術屋でその仕事は事務屋の領域のことだからとか、自分は機械屋で電気のことには知らないよといった類は多い。必要性はわかるが時間がなくて取り組めないという壁も沢山の人が作る壁である。壁を作らなかった人たちのことを考えてみてほしい。ほとんどの経営者は、大学の経営学科を出て、その後の仕事でも経営の道を歩んだ訳ではない。それぞれほかの道を歩みながら、経営の手腕を学び、身につけたのである。それどころか大経営者の中には、小学校しか出ていない人だっているのである。また、偉大な業績をあげた人たちも、暇で時間が充分あったからできたのだというケースは、まずないのではなからうか。たいていは忙しい中に自分の努力でなんとか細切れの時間を作り出し、その中で成し遂げたのである。

私も若い頃は、結構、自分から不必要な壁を作った思い出がある。上役からこの問題をどう考えるかと尋ねられたとき、自分のポジションでは十分な検討の材料を持っているわけではなし、そんなジャッジは上の人ができる仕事じゃないかと思ったこともあった。また、業務に関係の薄い分野のことを調べてみたいと思ったが、そのためにいくらかの会社の費用を要するために、ついつい言いだせなかったこともあった。今にして思えば当時の上司は、もしも自分から燃えて何かをしたいと提案する若者がいたら、応援してやりたいと思っていたのではないかと推測する。

なぜならば、みずから積極的に提案してくれるような若者がいて、彼らがやりたいように力を出せる職場を作れば、それは活力のある楽しい職場であり、結局それこそが会社の宝になると思うからである。

鶏が先でもいいし卵からでもいいが、とにかく上役は部下がやる気を出すように指導するべきであるし、また、若者はみずから積極的に燃え、やる気を起こすべきなのである。そうして楽しく仕事をし、それによって、たった一つしかない自分の大切な人生を充実させて、楽しく過ごしてくれることを乞い願うのである。